

明日への架け橋 若手技術者!

インフラ維持・整備に取り組む地方公共団体や建設会社の若手技術者にインタビュー。現場からの生の声を、建設関係者やこれから建設業を目指す若者に向けてお届けします。

Vol.11

旭工榮株式会社
調査課

佐藤祐太さん Yuta Sato

施工管理からの転身

建設コンサルタントとして

地域のインフラを支える



● PROFILE ●

さとうゆうた
佐藤祐太

1993年生まれ。福島県出身。行田市にあるものづくり大学を卒業後、建築系の会社を経て2022年に旭工榮株式会社に入社。調査課に在籍し、主に自治体から発注される道路や橋梁、水路等の調査・点検を担当している。趣味はサッカー、スポーツ観戦。

今回紹介するのは、埼玉県行田市に本社を構える建設コンサルタント・旭工榮株式会社で調査業務を担当する佐藤祐太さんです。前職は建築の施工管理に携わっていた佐藤さんですが、結婚を機に働き方を見直し、地域密着型の同社に転職。現在は、農業用水路やため池、橋梁などのインフラ点検・調査を通じて、安全で安心な地域づくりに貢献しています。

調査結果を基に技術者として意見を述べるといって建設コンサルタントならではの難しさを感じながらも、自分の関わったものが目に見える形で残るという仕事に魅力を感じていると話す佐藤さん。毎回異なる現場で奮闘しながら、日々の業務に真摯に向き合う姿勢に迫りました。

また、行田市の観光資源の目玉であり、同社が測量技術を提供している「田んぼアート」についても伺いました。

施工管理からのジョブチェンジで 調査業務に奮闘

旭工業に入社した経緯を教えてください。

前職では内装の施工管理をしていたのですが、私生活との両立を考えるとハードな面もあり、結婚を機に妻の実家の近くで仕事を探した結果当社を見つけました。当社は建設コンサルテイングや測量調査を中心に事業を展開しており前職とは異なる業種なのですが、高校・大学で建築を学ぶ中で測量も多少勉強しており、全く知らない業界ではなかったことと、会社の雰囲気も良かったため入社に至りました。

現在の仕事について教えてください。

当社には設計課、測量課、調査課があるのですが、私は調査課に在籍し、道路や橋梁のほか、水路やため池、樋門などの農業用土木施設の点検・調査をメインに担当しています。現地で調査した結果を報告書にまとめて、最終的には発注者である自治体などに報告・説明を行います。

発注者は官庁と民間、どちらが多いですか。

9割ほどは官庁の仕事です。当社は地域密着の建設コンサルタントなので、一番多いのは地元・行田市からの仕事ですが、周辺の鴻巣市や熊谷市から発注される仕事も手掛けています。

現在はどういう仕事を担当していますか。

ため池の設計をしているのですが、現場に行かない日は基本的には内業をします。5月や6月は繁忙期ではないので、基本的には朝8時半に出勤して17時半には退社できています。

農業土木の施設を扱うため、私たちの課では農業用水路から水がなくなる9月から10月以降が繁忙期となります。繁忙期である冬の時期には、夕方16時頃まで

現場で作業を行い、それから事務所に戻って写真整理などをするので、残業することも多くなります。

前職の施工管理の仕事とは、全く違う業界ではないとはいえない異なる面も多いと思います。入社前と入社後で、仕事に対する印象は変わりましたか。

農業土木に携わるといって、入社前は「真夏の暑い中、泥まみれで仕事をするのかな」といった不安もありました。ただ、入社してみると現場に1日行っただけで1カ月内業をするといったことも珍しくなく、「こんなに事務所で仕事をするのだな」と驚きました。



事務所で仕事をする佐藤さん。前職では毎日現場に行くのが当たり前だったそうで、今も現場仕事が好きなのもあり、当初は「こんなに事務所にばかりいていいの心配になった」と笑う。

調査結果をもとに意見を述べる 「建設コンサル」という立場の難しさ

農業用土木施設の調査はどのように行われるのでしょうか。

現場では基本的には目視で、ひび割れや欠損がないかを調べます。管水路の場合は、80cm以上の管であれば実際に管内に入って調査するのですが、ヘッドライトを付けて、かがんだ状態のまま1kmとか2kmもある管内をしつかりと見なければいけないので、体力的にも大変です。80cm未満の管の場合は、ビデオカメラを管内に走らせて、撮影された映像でひび割れの状態を確認します。

2023年から2024年にかけては、福島県のため池の劣化診断も担当されたそうですね。

はい。福島県には調査や点検がし切れていない水路なども多く、毎年のように当社で業務を担当しています。1〜2カ月は現地で調査を行い、その後の報告書作成は会社に戻ってきて行います。

佐藤さんたちが調査をして報告書にまとめた後、その後は実際の設計や工事に入ることになると思いますが、調査から工事完了までにはどのくらいの時間がかかるのでしょうか。

早くても2、3年でしょうか。最近はインフラの老朽化とそれに伴う事故なども頻発しているので、調査した結果緊急で工事する必要があると分かった場合は、当社も建設コンサルタントとして意見を伝えます。ただ、その後実際に優先して工事を行うかどうかは、予算の都合などもあるので発注者である自治体の判断に委ねることになります。

仕事をする上で苦労した経験があれば教えてください。

「建設コンサルタント」という立場には、入社から3年経った今でも難しさを感じています。調査した結果を報告書にまとめ、報告書を基に技術者として意見を述べなければいけないのですが、「直す必要はない」と結論付けたのに、その後その構造物に何かあったら…などと考えると、責任は重大だなと思います。とはいえ、私たちが不安を持っていたのは駄目なので、上司のアドバイスも受けながら発注者に説明をしています。

——入社して3年が経ちましたが、仕事に対する心境の変化はありますか。

最近のインフラの老朽化による事故などを見ると、自分たちの仕事がこうした事態に直結する可能性があるものだというのを強く感じます。これまでも責任感を持って仕事をしてきたつもりではありますが、改めて仕事に対する責任の重さを自覚しており、今後とも真摯に業務に取り組んでいきたいと思っています。

行田市の「田んぼアート」に 測量技術を提供

——地元で根差した建設コンサルタントとしての、御社の強みを教えてください。

当社では水中ドローンなどの最新技術も積極的に導入しています。最新の技術による業務の効率化は発注者である自治体のためにもなるので、そういった部分には投資をしていると思います。また、市内には建設コンサルタントは当社しかないので、市の方からも何かと頼っていただいています。

——行田市といえば、水田に色とりどりの稲を使って絵や文字を描く「田んぼアート」でも有名ですね。御社では測量技術により田んぼアート実現をサポートし

ているようですが、田んぼアートを手掛けるようになった経緯を教えてください。

行田市から「田んぼアートをやりたいのだけれど、実際に田んぼに絵を描くにはどうしたらいいか」という相談があり、当社が測量技術を提供することになりました。これも、行田市と当社が築いてきた信頼関係があつて成り立っている事業だと思います。

——田んぼアートはどのように制作されるのでしょうか。

まずは、デザイン・設計図に基づいて各品種の稲の配置を決める測量を行い、田植えの目印となる約1万本の杭を打ちます。基本的には測量課が中心となつて

作業を行うのですが、設計課や私たち調査課も応援に行きます。今年の作業はちょうど昨日（5月末）から始まりました。

——1万本も杭を打つんですね。測量や杭打ちは何人で行っているのですか。

3人1組の4班、計12人で行っています。杭の位置はコンピューターで出すのですが、実際に杭を打つのは人の手で行うので、1人が測量機器を見て、もう2人は田んぼに入って杭を打つ…という作業になります。設置した杭をロープでつないで図柄を描き、その後の田植えでは約1,000人のボランティアの方にも協力していただき稲を植えます。



田んぼアートのための測量と杭打ちの様子。杭打ち後の田植えは手作業のため、ボランティアも募り実施された。今年は人気アニメをモチーフにした絵柄だったこともあり、子どもの参加も多かったそう。
田んぼアートは、上写真に映る行田タワーから見るができる。



橋梁点検の様子。同社では道路や農業土木施設などの点検も行うが、橋梁はとりわけ多く、昨年（2024年）は約50橋程度の点検を行った。

目に見える構造物を作れるのが 建設コンサルの魅力

——元々はご家庭の事情で御社に入社したとのことですが、職場環境はいかがですか。

上司が下の意見を柔軟に取り入れてくれるので、そこは良いなと思っています。若手が「もっとこうしたい方が良いんじゃないか」と言ったら、上司は頭ごなしに否定はせず「それだと技術的に厳しいかも」といった意見や、「こうしたらもっと良くなる」といったアドバイスをくれます。逆に、若手が学んだ新しい技術

を展開して全体で活用していこう、という流れになることもあります。

あとは、前職では土日仕事ということが多かったのですが、当社では休みも取りやすいので、家庭での時間が増え、子どもの成長を見られるのが嬉しいです。

——佐藤さんは、インフラの維持管理の現状と今後の展望について、どういった考えを持っていますか。

私たちは建設コンサルタントとして点検を行い、その結果を自治体に報告していますが、全てのインフラを適切に管理するというのはとても難しいことだと思います。橋梁点検などではドローンを使用することによる効率化なども進んではいますが、現状では全てのインフラに適用できるわけではありません。まだまだ課題は多いと思いますが、例えば橋梁を継続的に撮影し、AIによって損傷具合を判定できるシステムなども検討されていると聞きます。時間はかかると思いますが、こうした仕組みができれば維持管理を省力化し、他の仕事に人手を割くことができるようになるのが理想だなと思います。

——今後取り組みたい仕事はありますか。

「こんな仕事をしたい」というよりは、どんな業務も好き嫌いせず学べるものは学びたいと思っています。入社以来完全に同じ業務をしたという経験がほぼなく、設計では道路や水道、ため池、測量も川や道路、土地など、いつも異なる構造物、現場を担当しています。常に新しいことを勉強しなければいけないという大変さはあるのですが、色々な経験をして視野を広げられればと考えています。

——若手技術者へのアドバイスをお願いします。

仕事をする上では「報連相」が大事だと言われますが、私自身は元々自分の意見を言うことが苦手で、上司に相談すべきことも相談できず、そのせいで前職で

は大ごとになってしまったことがありました。仕事に関する知識は会社に入ってからでも学べると思うので、人付き合いやコミュニケーションに関するスキルを磨いておくことをおすすめします。

また、今後は技術的な知識だけでなくIT関連の勉強もしておくと思います。

——佐藤さんの考える、建設コンサルタントの魅力を教えてください。

家族や友達に「この水路の調査をした」「何年かしたら自分が考えた道ができる」と自慢できるのは良いなと思っています。目に見える形で物が出来上がって、周りの人に見てもらえるというのはこの仕事の大きな魅力です。あとは、私は熱しやすく冷めやすい性格なので、設計、測量、調査といういろいろな仕事ができ、常に新しいことに挑戦できる環境も楽しめています。

（取材日：2025年5月）

●取材後記●



幅広い業務を通じて、建設コンサルタントとしての責任感を深めている姿が印象的だった佐藤さん。結婚を気に転職をしたそうでしたが、プライベートも充実させながら、技術者として地域に根ざした仕事をしている姿は、1つのロールモデルとして建設業を目指す若い人にも参考になるものだと思います。